

スポーツを解析する（その8）

伊達公子を超えた杉山愛

盛田 常夫

テニス女子の杉山愛はキャリア最高の成績で2003年のトーナメントを終えた。WTA(女子テニス連盟)ダブルス・ランキング3位、シングルス・ランキング10位は立派だ。ポルシェ世界選手権ポイントでは、クライシュテルスとのダブルス・チームランキング2位、シングルスが9位の成績で、トッププロだけが競うWTAの最終行事(ポルシェ・チャンピオンシップ、賞金総額3百万ドル、11月5-10日)に、ダブルスとシングルスの両方で参加する榮譽を獲得した。ここまで、ダブルスの個人別ランキング1位を維持していたが、選手権のダブルス決勝で敗れたために、年間1位の快挙を逃した。

スポーツにもいろいろあるが、年間を通して世界を転戦し、何十試合もこなして世界のトップに君臨している日本の女子スポーツ選手は杉山を措いていない。しかし、メディアの扱いは相応とは言えない。ゴルフだと、アメリカンツアーの予選落ちでもラウンドごとに事細かに報道されるが、優勝でもしない限り杉山の世界転戦が報道されることはまずない。テニス人口が少ない訳ではない。世界を舞台にこれだけ活躍している選手にもっと注目し、報道すべきではないか。

ダブルスのスペシャリストと見なされ、シングルスは注目されてこなかった杉山だが、シングルスでもトッププロの仲間に入った。パワーテニスの時代、小柄で非力な杉山が意外な頑張りを見せている。

女子テニスの動向

世界の女子テニスは新旧交代の時期に入っている。依然として、ウィリアムス姉妹の力は群を抜いているが、度重なる怪我や身内の不幸(長姉の銃殺)で、今後の選手生活は不透明だ。彼女たちが休んでいる間に、ベルギーのクライシュテルスとエナンがNO.1の座を争うようになった。巨漢のダーヴェンポートやカプリアティはトップテンに残っているが、もうヴェテランの域に達している。セレシュもヒンギスも、クルニコワももういない。

これに代わって、次の女子世界テニスを背負うと見られるのがロシアの若手。22歳コンビのディメンチエーヴァと今年急成長したミスキナはトップテンに入り、そのすぐ後に19歳のズヴォナレーヴァ、21歳のペトローヴァが続いている。16歳のシャラポーナや17歳のサフィーナも、今後の成長が有望視されている。ディメンチエーヴァを除き、皆、2003年に急成長した選手だ。シャラポーナは今年の全日本オープンで、ハンガリーのカプロシュを破って優勝した。クルニコワに代わるアイドル選手。女子テニスの次の舞台は、ロシア、ベルギーの若い選手とウィリアムス姉妹の戦いになりそうだ。

世界ランク20位に入っている選手で、パワーテニスの範疇に入らないのはルービンと杉山ぐらいで、後は体も大きいしパワーも凄い。とにかく強いサーブと力任せのストローク

が、現在の女子テニスを支配している。ウィリアムス姉妹のサービス・スピードは平均で時速 180km を超える。トップテンの選手のそれは平均で 170Km/h だ。エナンは 168 センチと小柄だが、データで見る限りトッププロの平均身長は 175 センチ、体重が 65kg。しかし、実際のウェイトは公称よりかなりありそうだ。ダーヴェンポートは 190 センチ近いし、ペトローヴァ、ディメンティエーヴァ、ミシュキナは 180 センチ、ヴィーナス・ウィリアムスは 185 センチ、妹のセリナは 175 センチ。これにたいして、杉山愛は 163 センチ、55 キロ。大人と子供ほどの体格の違いのある中で、杉山が奮闘しているのは驚異だ。

ジェネラリ・レディース戦

杉山が優勝した 10 月末のリンツ（オーストリア）ジュネラリ・レディースは、彼女の戦いをじっくりテレビ観戦（Eurosport）できる貴重な機会だった。杉山は直前のスイスコム・チャンレジでダブルスこそ優勝したが、シングルスではスロベニアのピシュニクに早々と負けてしまった。ここまで不振続きだったドキッチがクライシュテルスを破って決勝に進み、ロシアのズヴォナレーヴァはベストエイト、ペトローヴァがベストフォアに残った。

リンツのトーナメントは賞金額（獲得ポイント）が大きいので、ここで勝てば WTA の最終行事（チャンピオンシップ）への可能性が開ける。今年の招待選手はシングルス 8 名、ダブルス 4 組だけ。日本選手では過去に伊達公子が 1996 年にシングルスで招待され、これを最後に引退している。杉山のダブルスへの招待はずでに決まっていたが、シングルスで招待されるためには対象となるトーナメントのポイントで 10 位以内を確保する必要がある。ウィリアムス姉妹の欠場が確定的で、10 位に入れば招待 8 名の枠に入るからだ。リンツ・トーナメントの開始時点で、チャンダ・ルービンが 10 位で、杉山が 11 位。ルービンは賞金額がリンツの半分のルクセンブルグ SEAT Open に出場し、杉山のダブルスパートナーのクライシュテルスもルクセンブルグに参戦した。

一回戦免除の杉山の最初の相手が前のトーナメントで負けたピシュニク。ここは貫禄を見せて雪辱。次の相手が好調ドキッチ。予想を覆してドキッチをフルセットで破り、決勝進出をかけてズヴォナレーヴァと闘った。ここから Eurosport で放映された。

身長 173 センチのズヴォナレーヴァは大柄とは言えないが、非常にパワフルなテニスをする。今年のフレンチ・オープンでヴィーナス・ウィリアムスを破ってベストエイトに進出した。前のゲームではイスラエルのピストレーヴァに最終セット 1 - 5 とリードされたところからひっくり返して勝ち残った。このゲームも TV 観戦したが、最終セットは 1 ポイントの決着に 15 ~ 20 ストロークも必要な息詰まるストローク合戦だった。これに耐えたズヴォナレーヴァは粘りもあるところを見せた。パワーに加えストローク力がある選手は、杉山にとってかなりの難敵だ。

この試合、杉山はセットオールから第三セットをワンブレイクして、そのまま押し切った。ズヴォナレーヴァは、多分、小柄な杉山を力でねじ伏せることができると過信したのだろう。ストローク合戦に痺れを切らし、非常にナーバスになっていた。それでも切れない

いで我慢していたが、最後は経験豊富で、最高の調子に近かった杉山に押し切られた。

決勝の相手は、準決勝で技巧派のパティ・シュニーダーを力でねじ伏せたペトロヴァ。ペトロヴァの強烈なサーブに、シュニーダーは為す術もなかった。力で押されれば、杉山も簡単に料理されるのではないかというのが解説者の事前予想。しかし、接戦ではあったが、最終セットにもつれることなく、杉山がペトロヴァをストレートで下した。

同じ日にルクセンブルグで決勝を戦ったルービンがクライシュテルスに負け、チャンピオンシップ・ポイントでわずかに杉山がルービンを上回って10位に入った。ダブルスパートナーが杉山を助けた。リンツの勝利は杉山にとって、TierII(賞金総額が585,000ドル超)以上の大会で今季二勝目。価値ある勝利だった。

ダブルスで獲得した技術

杉山の最大の武器は、フットワークである。ウィリアムス姉妹が無敵なのは、強烈なパワーだけでなく、誰にも負けないフットワークを持っているからだ。杉山は非力だが、ゲーム中、休むことなく足を動かしている。だから次の動作へ移動が他の選手よりワンポイント速い。これがフォアハンドの処理に生きてくる。パワーヒッターはフォアに角度のある強い球を打ち込んでくるから、そのスピードと力に負けてはゲームにならないからだ。

もちろん、脚力だけでは戦えない。杉山には脚力を支える優れたアンティシペーションがある。フォアであれバックであれ、打球のコース判断が一瞬遅れると差し込まれ、相手に緩く浅いチャンスボールを返すことになる。相手のフォームから一瞬のうちにコースを読むアンティシペーションがなければ、脚力が活かない。杉山はこの能力に優れている。だから、素早くボールの落下点に走り込むことができる。この能力はダブルス戦から獲得したものだ。杉山はネット際のポーチを得意にしている。相手の球筋を読むのがうまいのだ。この能力がシングルス戦で脚力を十二分に活かしている。

杉山の両手打ちのバックハンドは力があり角度も付けられるので、ポイントを取る仕掛けができる。やや非力なフォアはコースを分けて、長いボールで返すことだけを心がけていけばよい。こうやってストローク合戦で我慢比べをしている間に、向こうが痺れを切らす。力任せに雑なストロークになるか、焦ってネットに出てくると、杉山のチャンス。準決勝と決勝のゲームはすべてのこのパターンでポイントをとっている。非力とはいえ、杉山がトップテンに入った理由の一つに、フォアハンド・ストロークの進歩がある。エースはとれなくても、強い球をきちんと返す力がなければ、トップテンには入れない。フォアで力負けしなくなったことが、最近のランク急上昇の最大の要因だろう。

体が大きく、サービス・エースのとれるペトロヴァは堪え性がなかった。身長が高い分だけ腰が高くなる。ストローク合戦になると、先に足がくたびれる。ストロークが得意なズヴォナレーヴァの方が難敵だった。ペトロヴァは力づくで簡単に決めようとしればネットに出てきた。これなれば杉山の思うつぼで、クロスとサイドのパスが決められる。ここでもダブルスの経験が活かしている。ダブルスのパッシングコースはシングルスより狭

いから、シングルスで安易に前に出てくるプレーヤーは杉山の格好の餌食になる。

シュニーダーがはじかれ続けていたペトロヴァのサーブを、杉山はきっちり返していた。堅実なレシーブもまたダブルス戦から獲得したものだろう。ダブルスのレシーブの基本はクロスに返すことにある。狭いコースに合わせなければならないから、うまくボールをラケット面に当てる技術が必要になる。ミックスダブルスを含め、数多くのダブルス・ゲームをこなしている杉山はその技術をもっている。レシーブ、つまり「受け」は攻撃と防御が分かれているボール・ゲームでは非常に重要な要素で、「受け」に強いことが負けない基本なのである。女子テニス界きってのテクニシャンであるシュニーダーは、小手先の技術に頼りすぎ、常に腰高で、走ることに怠惰だ。シュニーダーがボロ負けし、杉山がきっちり勝てる違いはここにある。

準決勝、決勝を含め、杉山はかなりのダブルフォルト（8本前後）を犯している。ふつうこれだけのフォルトを犯すと自分からゲームを壊してしまう。しかし、杉山のフォルトには理由があると見た。非力なサービスを叩かれないように、杉山はコースと深さに気をつけているようだ。だからどうしても、フォルトのリスクが高い。不調のフォルトではなく、攻めのフォルトだから、ゲームが壊れない。

ダブルスよりシングルスを優先する選手が多い中で、杉山は常にダブルスとの双方にエントリーしている。ダブルスの経験を最大限に利用している数少ない選手の一人だろう。杉山ももう28歳だから、残された選手生活は長くない。後に続く選手は是非、杉山を見習って欲しいものだ。杉山愛は非力で小柄な選手が世界で通用できる一つの型を示している。

伊達を超える

リンツ・ツアーの後はアメリカ・フィラデルフィアの Advanta チャンピオンシップ。選手権前のツアー最終戦だ。初戦こそ体の重かった杉山だが、三回戦でショウグネーシーを押し切り、ルービンが三回戦で敗れたために、選手権ポイントで9位に上昇し、この時点で選手権招待を確定させた。それにしても壮絶だったのが、準決勝のモーレスモ戦。Eurosportが深夜のライブで見せてくれた。WTA サイトで今年のベストマッチの一つと言わしめた戦いが繰り広げられた。時差ぼけがとれた杉山は絶好調で第一セットを6-2に取り、第二セットも5-1とリードして、二週連続の決勝は目前だった。ところが、ここからモーレスモが猛烈に当たり出した。もう神懸かり的なプレーで、5-6とひっくり返した。しかし、杉山も負けずに6-6のタイブレークに持ち込み、ここでもポイントで5-1とリードし、勝負あったと思われた。しかし、再びモーレスモが盛り返して、何とタイブレークをとってしまった。

ふつう、このような展開のばあい、第三セットは簡単に終わる。実際、杉山は1-3とリードされ、これまでかと思われた。ところが、今度は杉山が盛り返して、4-3とリードする。レスピアンを公言し、男子と見間違える体型とパワーのモーレスモ相手にこの粘りだ。しかし、5-5からそのまま押し切られてしまった。杉山は両足の痙攣で、最後はもう闘えなくなっていた。壮絶なゲームだった。この後、もう一つのシングルス戦準決勝をはさんで、

杉山はさらにダブルスの準決勝をフルセットで戦った。このエネルギーはどこから湧いてくるのだろう。

常にトップテンにいた伊達公子はランキングだけを見れば、杉山の上に行く。しかし、当時の選手と現在の選手では、テニスの質がまったく違う。トップテンの中にいる選手はすべて、当時のグラフかそれ以上の力をもつ選手だと考えれば良い。フォアのストローク力ではもう伊達を超えただろう。杉山にはダブルスで鍛えた得意のボレーとスマッシュがあるから、その分、もう伊達を超えている。伊達を継ぐ選手として期待されながら、なかなかトップテンにたどり着けなかった杉山だが、ダブルスの経験に加え、パワーに負けないう力を付けて、選手生活の最後の舞台に躍り出た。今少し頑張ってもらいたい。